タイトル

ゴージャスお宝鑑定家～「う～ん、ゴージャス！」39

登場人物

剛田（ごうだ） 剛田質店の店主であり鑑定家。優雅で品のある立ち居振る舞いと、極端に高い「ゴージャス！」を口癖に、どんな場面でも優雅さを保つことを信条としている。周囲からは「クセが強い」と評されるが本人は全く意に介さない。

白金（しろがね） 剛田質店の見習い鑑定士。常識的な価値観を持つ普通の青年で、剛田の個性的な言動や鑑定方法に毎回翻弄される。神経質で心配性な一面もあり、お宝に対する敬意が深い。

依頼人　老舗の資産家。家族から相続したアクアマリン製のコートを持ち込むが、その価値や本物かどうかに不安を抱いている。どこか抜けた一面があり、剛田の言動に振り回される。

シーン1：剛田質店の朝

場面説明　剛田質店の店内。天井から豪華なシャンデリアが下がり、壁には絢爛豪華な装飾が施されている。店内には高価そうな調度品が並ぶ。

登場人物

剛田

白金

（剛田、シャンデリアの下で優雅に紅茶を飲んでいる。白金は店のカウンターで書類整理をしている。）

剛田（カップを高く掲げながら）「う～ん、ゴージャス！この朝日に映えるダージリンの輝き、まさに私の一日を祝福しているようだ！」

白金（小声で独り言）「いや、ただの紅茶ですけどね。毎朝これに30分かけるから、書類が全然進まないんだよなぁ。」

剛田（白金に向き直り）「白金くん！その書類の山、何たる無粋な風景！我が店においては美しさが第一義だ。整えるがよい！」

白金「いや、確かに散らかってますけど、それどころじゃないんですよ！今日も新しい依頼が届いてるんです。確認してもらわないと！」

剛田（ゆっくり立ち上がり、ポーズを決めながら）「新しい依頼とな？ ゴージャスの香りを感じる…さぁ、見せたまえ！」

シーン2：依頼人の登場

場面説明 依頼人が持ち込んだ品物がテーブルに置かれる。緊張感のある雰囲気の中、剛田がそれを吟味する。

登場人物

剛田

白金

依頼人

（依頼人が店に入ってくる。手には豪華そうな箱を持っている。）

依頼人「こちら、家に代々伝わる品なのですが、鑑定していただけますか？」

白金（ニコリと微笑む）「かしこまりました。剛田先生、こちらです。」

（剛田、手袋をはめて箱を開ける。中にはアクアマリン製のインバネスコートが収められている。）

剛田（息を呑む）「う…う～ん、ゴージャス！この輝き、この質感、この圧倒的存在感…！まさに一流の逸品！」

白金（驚きながら）「えっ！？コートが宝石でできてるんですか！？着られるんですか、それ？」

剛田「白金くん、何を愚問を！これは着るものではない…鑑賞するものだ！」

依頼人（不安そうに）「鑑賞する…？でも、これは私の曽祖母が大切にしていたものなんです。家族にとっては特別な品で…。」

白金（優しく）「なるほど、思い入れのある品なんですね。剛田先生、この依頼人の背景も考慮して…。」

剛田（真剣な表情で）「もちろんだ、白金くん。この品の本当の価値は…その石が語る言葉にある！」

シーン3：石言葉の熱弁

場面説明　剛田が石言葉について熱く語りアクアマリンが持つ魅力を力説する

剛田（依頼人に向き直り）「アクアマリン、知っているかね？　その石言葉は、聡明、と、癒し、だ。このコートを纏う者は知能が高まり、全てを見通す目を得るとも言われている！」

依頼人　「そ、そんな言い伝えが…？」

剛田（勢いよくコートを羽織り）「試してみようではないか！　見よ、この輝き！知能が高まるのを感じる！　白金くん、君の昨日の昼食は…カツ丼だ！」

白金（驚愕）「えっ、本当に当たってる！？いや、先生、それ偶然ですよね？」

剛田（さらに身振りを大きくして）「では…依頼人の一週間の食事を言い当ててみせよう！」

依頼人（慌てながら）「そんな…本当に分かるんですか？」

剛田「月曜日はサンドイッチ、火曜日はカレー…！」

白金（ツッコミながら）「もう超能力じゃないですか！」

依頼人（感激して拍手）「すごい！ 本当にそんな力が！」

白金「いやいや、冷静になりましょう！ 先生、コートの価格、決めないと！」

シーン4：査定の議論

場面説明 剛田と白金が品物の査定額について議論する。

剛田（じっくり考えながら）「ふむ…これはゴージャス度100点満点中…200点だ。もはや買取価格を語ること自体が失礼に値する。」

白金（困惑しながら）「それじゃ困りますよ！ 相場とかないんですか？」

剛田（急に指を立てて）「決めた！ この品は1億円で買い取る！」

白金（驚愕）「1億円！？ 冗談ですよね！？ 店の財政どうするんですか！」

剛田（キラリと笑い）「白金くん、覚えておきたまえ。我が店は…ゴージャスたるもの優雅たれ！」

白金（頭を抱えながら）「優雅すぎて破産しますよ…」

シーン5：エピローグ

場面説明 夜の剛田質店。剛田が一人で思索にふけっている。

（剛田、店内のソファに腰掛けている。周囲は薄暗く、ランプの明かりだけが揺れている。）

剛田（独り言）「優雅さか…インテリジェンスか…。どちらを極めるべきか…いや、両方を極めてこそ真のゴージャス…！」

（剛田、真剣な表情でポーズを決めるが、その姿に微かなため息が漏れる。）

白金（奥から出てくる）「先生、夜遅くまで何やってるんですか…。早く寝てくださいよ。」

剛田（振り返りながら）「白金くん、この悩みこそが私を高めるのだ。明日も新たなゴージャスを追求するために！」

白金（呆れた顔で）「もう少し普通に生きられませんかね…。おやすみなさい。」

（白金が去り、剛田が一人ランプの明かりの中で笑みを浮かべる。）

剛田（小声で）「う～ん…ゴージャス。」

（画面が暗転し、優雅な音楽が流れる中でエンドロールが始まる。）

尺不足と対策案

指定された「80分超え」を達成するには、さらにシーンを追加したり、既存のシーンを拡張する必要があります。

提案する追加要素

1. **依頼人の詳細な背景シーン（約10分追加）**
2.

依頼人の家庭での逸話や、コートにまつわるエピソードを掘り下げて感情移入を促す。

3.

剛田のゴージャス流哲学シーン（約10分追加）

4.

剛田が「ゴージャスたるもの優雅たれ」の信念に基づき、過去のエピソードや哲学を語る場面を追加。

5.

品物の秘密をめぐるサスペンス（約10分追加）

6.

1. 実はコートに隠された機能や仕掛けがあり、それを剛田が推理していく要素を挿入。

7.

ユーモア重視のミニエピソード（約5〜10分追加）

8.

1. 店内で白金が慌てふためく短いコメディシーンや、剛田の他の依頼対応を描く。